「教育臨床総合研究10　2011研究」

手づくり楽器を用いた小学校音楽科の授業実践の試み
― ブラジルの民族楽器の製作を通して ―

A practical study with handmade Brazilian music instruments in music education at elementary school

安　部　啓　子*　　藤　井　浩　基**
Keiko ABE　　Koki FUJII

要　旨

本研究では，小学校音楽科における世界の諸民族の音楽の学習の教材研究として，著者自ら「諸外国に伝わる楽器」として民族楽器を製作し，小学校で授業実践を行ってきた。本稿は，取り組みの一部として，ブラジルの民族音楽カポエイラに用いられるビリンバウとアタバキの製作と，島根大学教育学部附属小学校における授業実践について報告し，手づくり楽器を用いた世界の諸民族の音楽の学習の在り方とその可能性について考察したものである。

キーワード
諸外国に伝わる楽器，世界の諸民族の音楽，手づくり楽器，ブラジル，カポエイラ

Ⅰ　はじめに

本稿は，小学校音楽科における世界の諸民族の音楽の学習の一環として，「諸外国に伝わる様々な楽器」に焦点を絞り，教師と児童が「民族楽器」を手づくりすることで，この題材について，新たな教材開発を試み，学習や指導法の在り方と可能性を考察したものである[1)]。

安部は，島根大学大学院教育学研究科の「学校教育実践研究」の一環として，自らのライフワークとする手づくり楽器の製作を試み，島根大学教育学部附属小学校の第５学年の児童を対象に授業実践を行なってきた。本稿は，安部による「ブラジルの音楽に親しもう～カポエイラの音楽をとおして～」を題材名とした授業実践の報告に基づくものである。安部の執筆担当箇所はⅢ－１，２，３，４及びⅣである。

藤井は，共同研究者及び指導教員の立場から，安部の授業実践について，立案段階から随時助言を行なうとともに，現場に立ち会い，本研究の意義と課題について考察した。藤井の執筆担当箇所は，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ－５，Ⅴである。

*島根大学大学院教育学研究科
**島根大学教育学部芸術表現教育講座

Ⅱ　問題の所在

１．学習指導要領における民族楽器の取り扱い

諸外国の民族楽器の取り扱いについて，小学校音楽科の学習指導要領で特に示されるようになったのは，1989年の第６次改訂にさかのぼる。この改訂で「諸外国の民族音楽」が重視されるようになり，「表現」領域の「器楽」の活動において，「ウ　第５学年及び第６学年で取り上げる旋律楽器は，既習の楽器を含めて，管楽器，弦楽器，打楽器，電子楽器，和楽器及び諸外国の民族楽器などの中から学校の実情に応じて選択すること。」と示された。これは1987年12月の教育課程審議会答申にある，「我が国及び諸外国の民族音楽については，国際理解を深めるなどの観点から，その指導の充実を図る」[2)] について，具体的に対応したものである。

この傾向は，現在も引き継がれ，2008年の改訂では，「指導計画の作成と内容の取り扱い」において，各学年の「A表現」の器楽の活動で取り上げる楽器について，「ア　各学年で取り上げる楽器は，木琴，鉄琴，和楽器，諸外国に伝わる様々な楽器を含めて，演奏の効果，学校や児童の実態を考慮して選択すること。」（下線部筆者）と示されている。

これをふまえ，小原（2008）は，改訂のポイントとして「我が国の音楽文化と他国の音楽文化」の重視を指摘し，高学年で扱う楽曲として「世界の民族楽器による独奏曲やアンサンブル」を挙げている（小原 2008：21）。

このように，小学校音楽科の学習指導要領において，世界の諸民族の楽器の取り扱いが積極的に示されるようになってから，すでに20年以上経ったことになる。

２．民族音楽学研究の成果還元と視聴覚教材の開発

1989年の学習指導要領改訂に際し，文部省（当時）教科調査官であった塩野（1989）は，「民族音楽の重視」について，「最近の研究の反映」とし，「民族音楽については……音楽学及び音楽教育学において，近年，異文化の理解や音楽を通した人間理解というような視点から，世界的に見直しが行なわれつつあることを反映しているのである」（塩野 1989：22）と述べている。

折しもその前年の1988年には，『音と映像による世界民族音楽大系』が，当時最新の記録媒体であったビデオディスク（VHD）で発売された。監修者・藤井知昭が「このように全体をとらえうる映像の記録によって，音のみの領域を大きくこえて，異なる諸民族の音楽や文化をいっそう明確に理解する糸口が開かれるに違いない」（藤井 1988：１）と記したように，民族音楽学の研究成果が一般に還元され，映像を通して世界の諸民族の音楽にふれる機会を大きく拡げたという点で，実に画期的なことであった。藤井はまた，「教育的立場から本体系が活用されることも重視し，音楽教育において取り扱われている資料の多くを収録するように考慮されている」とも記しているが，このような視聴覚資料の開発が，音楽科教育における世界の諸民族の音楽の学習を，実質的なものにならしめたことは言うまでもない。塩野の記述も，このような研究成果の還元を示唆したものといえよう。

時は移り，映像資料の記録媒体もVHS→VHD→LD→DVD等のように変化してきた。教師用資料に，民族音楽の映像を収録したDVDが当たり前にある時代であり，さらに，現在はインターネットを通じて，世界中の諸民族の音楽の映像が容易に，しかも安価に視聴できるようになった。

３．音楽科教育の現場における世界の諸民族の音楽の学習の現状と課題

このように20年を経て，民族音楽を学習する教材や環境は確実に豊かになっている。しかし，こうした状況の変化にあっても，例えば「しかし，現実は，諸民族の音楽を教える環境が整っているわけではなく，むしろ敬遠されていることのほうが多いのが現状だと思います。CDを聴く，あるいはDVDを観るだけの授業が多くを占めており，興味のある僅かな音楽教師が，個人的な情報収集や教材研究によって授業を実施していることも多いのではないかと思います。」（水野 2006：11）といった現場の声があるように，依然として多くの問題点や教師の悩みの声が聞かれるのも事実である。福永（2007）は，特に楽器についての問題について，「諸民族の音楽の知識が少ない教員には，民族音楽の取り扱い方がわからない。現状は，ビデオやCDのみを使った鑑賞を中心に行っている。体験学習を取り入れるケースは多くない。なぜなら，諸外国の楽器の実践を授業で取り入れる場合には，数々の問題があるからだ。例えば，楽器を手に入れなくてはならないという問題である。」（福永 2007：83）と端的に述べている。

そこで筆者らは，視聴覚教材に偏重しがちな従来の諸民族の音楽の学習に，教師や児童が自ら民族楽器を手づくりし，教材として授業に導入する試案を模索することにした。

Ⅲ　本研究の視点

１．手づくり楽器を授業で取り上げる意義

（１）楽器を揃えることができないという課題の解決策として

まず，民族楽器を調達する方法がきわめて限られている。本物を求めようとすると，その多くが輸入に頼らざるを得ない。商品企画化されていないものがほとんどである。逆説的ではあるが，商品化され大量生産されることによって，民族楽器としての価値が失われかねないという側面もある。『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 4 no. 1（2006）には，【情報アーカイブス】として，民族楽器を入手できる販売店等が紹介されており，大変参考になる。しかし，やはり取り扱う業者の数も少なく，学校での購入は容易ではない。

また，コストの問題も考えなくてはならない。現在では，民族楽器もネットショッピングできるようになっているものの，小さい楽器であれば，手頃な値段で買うことができるものもあるが，ある程度の大きさになったり，珍しいものになったりすると値段は上がる。授業を成り立たせるためには，楽器によっては人数分必要になり，またはグループ学習や，交代して演奏する場合でも，ある程度の数は必要である。

こうした目の前の問題点の解決策として，民族楽器を手づくりすることにより，ホームセンターなどで材料をそろえ，コストをおさえることが可能になる。

（２）楽器の構造や発音の原理を学習する手立てとして

手づくり楽器によって，楽器の構造や発音の原理を学習できる。実際に楽器を目の前にして，教員から作り方を学んだり，または児童が自身で楽器を作ったりすることで，その楽器が何の材料でできているのか，また，どこがどのように響いて音が出ているのか等に気がつくことができる。この点について降矢ら（2007）は，「教育現場では，安易な手作り楽器を玩具のように扱う実践も行われている。音楽教育における楽器作りには楽器と人間との本質的な関わりに

触れる体験となることを願う視点をもちたい。子どもには，楽器作りを通して，楽器の発音の原理を学ばせ，楽器を産した未知の人々の自然や文化にも目を向けさせたい。」と指摘している（降矢；安孫子；橋本；山﨑 2007：91）。

児童は，普段，既製の楽器を使っており，音の高さはどうやって変えるのかなど，楽器の構造，発音の原理，奏法を考える機会は多くはない。音が変わるということ１つに関しても，穴の開ける場所，楽器の長さ，大きさ，皮の厚さ，張り方などさまざまだが，体験しないとなかなか理解しにくい。手づくり楽器は，自分で調整することで，楽器の原理が自然と身に付くことが期待される。

（３）楽器があることによる児童の意欲の向上

鑑賞だけで諸民族の音楽を学ぶことには限界があるように思われる。やはり，児童の目の前に楽器があることで，意欲は上がり，理解も深くなることが予想される。楽器の必要性について，福永（2007）は「体験学習は，実際の楽器が目の前にあれば，生徒の興味の深さも変わってくる。生徒が楽器に触れることで，視覚的にも理解することができると考えられる。」（福永 2007：83）と述べている。

そして，それが教員自ら作った楽器である場合，さらに児童の関心は高まり，教員が製作過程の写真を見せる等しながら，作り方の説明をした場合，深い学習となるだろう。また，教員だけではなく，児童自身が楽器を製作するということにも筆者は注目している。

学校教育におけるものづくりの必要性を説き，今までに小・中学校で実際に子どもたちが作った楽器を用いた学習を試みてきた橋本は，「授業を通して何よりもまず強く感じたのは，生徒一人一人の，自分の楽器に対する強い愛着心である。楽器の音色に対する意識が，それまでと全く違ってくる印象を受けた。何しろ，自分で磨いた楽器をきちんと鳴らしたくて仕方ないのである。」（降矢；安孫子；橋本；山﨑 2007：95）と述べている。

筆者も実際に民族楽器を作り，作っている最中から完成したらどのような音が出るのかと期待し，作業が進む度に鳴らしてみたり，吹いたりする。そのため，いざ完成して演奏した際に思ったとおりになるととても嬉しい。それが反対に思ったような音が出ないとなると落胆する。しかし，心を込めて作ったものであるから，愛着もひとしおである。うまく音が出ないということはどこかに不備があるのではないか，自分の演奏方法が間違っているのではないか，使っている材料の材質に問題があるのではないかと，改善点を探し思考をめぐらす。きっとそれは児童でも言えることだろう。この体験は，出来上がった楽器をただ演奏する場合と比べ，学習に向かう意識に違いが出てくるはずである。

（４）多文化共生の観点から

国際化が進む時代の中で，学校教育現場でも国際理解について注目され，2008年改訂の学習指導要領でも引き続き示されている。

「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中，我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として，我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重す

る態度等を養う観点から，学校や学年の段階に応じ，我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。」（『小学校学習指導要領解説音楽編』）

このように，学習指導要領では国際理解についてうたわれており，音楽の授業においても国際教育をすすめるように示されているように，世界の諸民族の音楽の学習が重要視されていることは間違いない。

現在は，幾世代にも渡り日本に定住しているオールドカマーに加え，比較的新しい時期にさまざまな経緯で移住してきたニューカマーが増加している。そのため，地域の人々の多様な文化を理解し，共生していくという課題が生まれ，音楽教育においても多文化共生という考え方が注目されている（例えば，磯田 2009：87）。

そこで，世界の諸民族の音楽を学ぶということに意味が出てくる。楽器に使われている材料からその国の環境や気候，産業等が見えてくる。儀式としての音楽なのか，芸能なのか等，使用目的を知ることで，生活や文化を理解することができる。また，楽器はある国でできたものが他の地域に渡って根付いたり，その過程で変化したりと，他の国と結びついている場合が多いため，歴史的な背景も学ぶことができる。そのように，ただ音楽だけではなく，その国のさらに本質的なところまで学ぶということは，異文化を理解し，共生していくためにとても有効な手立てであると思われる。

本稿では，ブラジルの民族音楽「カポエイラ」による実践事例を取り上げたが，日系ブラジル人の増加も，筆者の問題意識のなかにあったことを付記しておきたい。

２．先行研究の分析と課題

楽器を手づくりする場合の参考書は，近年，数多く出版されている。

高度な製作技術を要する作り方の解説書もあれば，子どもが自力で簡単に製作できる楽器の解説書もある。また，小学校音楽科の指導事例においても，手づくりの簡単な楽器や音具が用いられる例は多い。夏休みの自由研究の工作として簡単な楽器製作を紹介したものもある。最近では，リサイクル楽器とよんで，廃材や使わなくなった身の回りのものを再利用して，簡単な楽器を作る試みが数多くみられる。

本研究では，世界の諸民族の音楽の学習の教材として，できるだけオリジナルの民族楽器に近づけて手づくりをするように心がけた。一方で，同時に現場の教師が誰でも作ることができるように配慮することも不可欠であった。そこで，筆者は，特に，谷中（2006），藤原（1995），藤原（2000），関根（2003），神代（1987）等を参照し，作り方の概要を把握し，適宜，映像やインターネット等から得た情報を加味しながら，独自の方法で製作していった。

その過程で，先行研究における作り方で，はたしてどのぐらいの時間がかかるのか，実際に作ってみたときの難易度はどうかなど，既存の作り方の検証も必然的にともなうこととなった。

筆者はこれまで，ビリンバウ，アタバキ，ボンボ，ツィター，ディジュリドゥ，板ささらといった楽器を手づくりしてきた。本研究における授業実践では，ブラジルの民族楽器ビリンバウとアタバキを取り上げた。

３．ブラジルの民族音楽と楽器を題材として

日本の音楽科教育において，ブラジルの民族音楽としては，サンバがよく取り上げられ，定着している。これまで教科書にも取り上げられており，すぐれた実践事例も報告されている（例えば，桝田 2006）。

今回は，安部の提案で，カポエイラ（Capoeira）を取り上げた。カポエイラは，ブラジルの格闘技で，そのルーツはアフリカにあると言われる。武器を持つことを禁じられたアフリカからの奴隷が，足蹴りや肘を使った武芸を編み出したとされる。カポエイラの音楽とは，その伴奏音楽で，代表的な楽器としてビリンバウ，アタバキ等の楽器が用いられる。次章で述べるように，この2つについては，安部が今回，特に手づくりを試みた。

カポエイラはブラジルの楽器特有の音色をじっくりと聴くためには，むしろサンバよりも適した音楽ではないかと思われる。本研究では，《音と映像による世界民族音楽大系》（1988）と《音と映像による新世界民族音楽大系》（1995）の映像を参照した。この両アーカイヴにも，ブラジルの代表的な民族音楽として，カポエイラは紹介されており，サンバに特化されがちなブラジルの民族音楽の学習に，新たな教材として開発する意義が大きいと思われる。

ビリンバウについては，山口修は，「からだに染み入るベリンバウの音」と題し，その魅力を次のように述べている。

「弦を爪弾く音がかすかに肌を伝わってくる。『お腹のベリンバウ』という楽器には瓢箪の共鳴体がついているので，演奏している男にしてみれば，瓢箪を文字通り腹部に当てて楽器を安定させて楽器との一体感を味わっているだけでなく，瓢箪から伝わってくる微妙な音をじかに肌で感じ取っているにちがいない。男の身体の内側で繰り広げられる繊細な音の変容は，傍観する人たちの視覚と聴覚を巻き込んで豊かな想像力をかきたてて，心の琴線に触れる。」（山口 2004：38）

ビリンバウは，インパクトのある外見であるが，構造がシンプルであり，発音の原理を学ぶことができる。カポエイラでも，サンバでも使われている楽器もあるので，ブラジルの音楽の学習には汎用性も高い。

アタバキも，カポエイラの音楽では欠かせない楽器である。コンガに似た縦置きの片面太鼓で，サンバに用いられるティンバやタンタンの原型として知られている。楽器の構造については，次章における安部の記述を参照いただきたい。授業実践では，時間的な制約及び楽器製作の難易度を考慮し，児童の学習活動としては，アタバキをつくる作業の一部を含めている。

カポエイラの音楽は，ビリンバウ，アタバキの他にも数種類の民族楽器を使うが，附属小学校が保有する楽器で代用が可能であることから，それらを適宜用いることにした。

Ⅳ　授業実践

題材名　　「ブラジルの音楽に親しもう ～ カポエイラの音楽をとおして ～ 」

対　象　　島根大学教育学部附属小学校５年１組

授業者　　安部啓子
実施日　　平成22年12月７日（火）３校時，10日（金）６校時，17日（金）６校時
附属小学校指導教員　神門洋子教諭

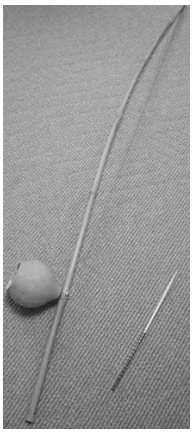
１．題材について

今回の授業では，カポエイラというブラジルの格闘技の伴奏音楽を取り上げた。普段はあまり触れることがない音楽だが，数年間にわたり，マツダのブランドイメージソングとして「Zoom-Zoom-Zoom」というカポエイラの音楽をアレンジしたものがCMで流れていた。これは，1993年に放映された『オンリー・ザ・ストロング』というカポエイラを取り上げた映画の音楽である。カポエイラとは，カポエイリスタ（カポエイラをする人）が円陣を組み，その中で二人のカポエイリスタによってジョーゴ（ゲーム）が繰り広げられるというものである。戦う二人はアクロバティックな技を繰り広げるため，舞踊のようにも見え，格闘技と舞踊の中間と表現されることが多い。円陣の人々は，中央で戦う二人を見ながら伴奏の楽器に合わせ手拍子を打ち，歌を歌う。その際，ビリンバウ，アタバキ，パンデイロ，アゴゴ，ヘコヘコという楽器が演奏される。

ブラジルの音楽として，賑やかなサンバがよく取り上げられるが，音楽に耳を傾けるというより，踊りや衣装の華やかさに目がいきがちである。それに比べ，カポエイラの音楽は，楽器特有の音色をじっくりと聴くためには適した題材である。また，ビリンバウを代表とする楽器の魅力からも本題材に選んだビリンバウは，インパクトのある外見であるが，構造がシンプルであり，発音の原理を学ぶことができる。

２．民族楽器の製作について

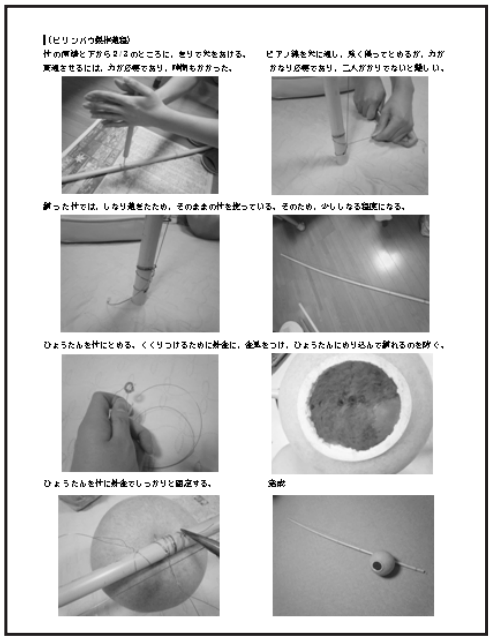
今回の授業では，上述の楽器を演奏する活動を取り入れた。しかし，ビリンバウやアタバキは通常，学校が所有していることはなく，入手もしにくい。ビリンバウは授業者が製作したものを用い，アタバキは児童が活動の中で製作し，それを用いた。パンデイロはタンバリン，ヘコヘコはギロを代用した。


安部製作の
ビリンバウ

〈ビリンバウの製作〉
材料：竹（ビリーバという木のかわり），ピアノ線，紐，ひょうたんもしくは缶
①　竹の両脇にきりで穴をあけ，その穴にピアノ線を張る。
②　共鳴膜であるひょうたんに穴をあけ，針金で竹にとりつける。

ビリンバウとは，ビリーバという木に針金を張って作るが，授業者は代わりに竹とピアノ線を使った。

ピアノ線は頑丈で，巻いた状態で売られているものを使うと，もとに戻る力が強いため，注意が必要である。竹においては，谷中（2006）を参考に，割った状態の竹を用いたが，完成し



て音を出してみると音が小さく授業では使えそうにないものであった。改善すべく，ビリンバウの実物の写真をよく観察したところ，授業者が作ったものは，竹がしなり過ぎているということに気がついた。また，藤原（1993）や神代（1987）では，竹をそのまま使っているものがあった。そのため，割った状態の竹ではなく，そのままの細い竹を用いた。しかし，しならせながらピアノ線を張ることは容易ではなく，ピアノ線が緩んでしまい，何回も張り直した。そのため，張っている際にピアノ線が緩まない方法を探し，紐を使う方法を採用した。ピアノ線の先に紐をつけ，その紐を持って引っ張り，即座に竹に紐を巻きつけるという方法である。この方法により，手が痛むこともなく，また緩むことも防げ，効率が上がった。

また，共鳴器については，（谷中 2006：72）には缶で代用するように記されていた。しかし，児童には本物に近いものに触れ，体験してほしいと思い，ひょうたんをインターネットで購入した。ひょうたんを半分に切って使うので，１つでビリンバウ２つ分になる。また，ひょうたんの上と下で大きさが違うので，高音と低音のビリンバウが出来上がる。しかし，授業で班に１つずつ，合計５つのビリンバウを用意したため，そのうちの３つは缶で代用した。そのため，時間ごとにひょうたんのビリンバウと缶のものを交代で使わせ，全員がひょうたんに触れられるようにした。

〈アタバキの製作〉

材料：犬用牛皮フリスビー，紐，塩ビパイプ（植木鉢，缶等）

安部製作のアタバキ

① フリスビーを水に浸し，一晩置いて柔らかくする。柿しぶや煎茶，紅茶などに浸け，もう一晩置いて皮をなめす。これにより，腐ることが防げる。

② 紐を通すための穴を開けるため，なめした皮に穴の目安を12個，油性マジックでしるしをつける。

③ 木材等の固いものを皮の下に敷き，穴あけポンチをしるしにセッティングし，上からかなづちで叩き，穴をあける。この作業は，下に敷くものが柔らかいとうまくいかない。

④ 底を抜いた缶など，胴体になるものを用意し，二枚の皮ではさみ，穴に紐を通していく。全ての穴に通ったら，蝶々結びで緩まないようにとめておく。この際，皮は湿ったままの状態で張る。

⑤ ２・３日皮が乾くのを待つ。この間に，何回か紐をさらにきつく張り直すことが必要。皮

は，乾くと縮んでくるので，さらに張ることができる。最後に，紐の余っている部分をぐるぐると巻きつけ，緩まないように固く結んでとめる。

アタバキは授業で児童が製作するため，なるべく簡単に製作できるようにと考えた。本来なら，胴体は木製だが，缶やプラスティックの植木鉢の底をくり抜いて使った。缶は缶切りで底板をはずし，植木鉢はのこぎりで切り落とした。皮の部分には牛皮でできた犬用フリスビーを使った。

授業者は，最終的に牛皮のフリスビーを使ったが，それまでいろいろな材料を使い，試行錯誤した。以前，ボンボを製作した際，藤原（2000），神代（1987）を参考に，ジーンズに油性ペンキを塗ったものを皮として張ったが，音が小さく，鈍い音がした。やはり本物の皮のような音は出ないため，授業で使うには改善が必要だと判断し，様々な方法を考えた。神代の文献には，材料が皮と記されているものもあったが，入手するのが難しいように感じた。そこで，ホームセンターで売れている骨型の犬用ガムを用いた。これも上記のように水に浸し，その後なめしたものを使ったが，大きな骨型のものでも，水に浸して開いてみると，小さい牛皮の寄せ集めであり，太鼓に張るには小さかった。また弱いため，張っている最中に破れてしまった。そのため，牛皮のフリスビーを採用した[3)]。しかし，なかなか市販されておらず，インターネットで購入した。皮を張る胴体の部分は，筆者は見本用として，太い塩ビパイプの短いものを使った。児童には，材質で音が変わることを気づかせたかったので，プラスティックの植木鉢，バケツ型の缶（小），缶の入れ物，筒状の食品保存容器等，様々な材料を用意した。しかし，プラスティックの植木鉢は柔らかいため強く張るのが難しく，バケツ型は，まっすぐの筒ではないので，これも張るのが大変だった。缶においては，授業者が用意したものの長さが短く，張る際に二枚の皮が重なってしまった。それに比べ，筒状の缶と，保存容器は簡単に張れた。その結果をもとに，胴体になる部分の材料は，ある程度の固さがあり，なるべく筒状で，皮の大きさに見合った長さが必要だということがわかった。しかし，乾いてから鳴らしてみると，あまりうまく張れなかったアタバキも良い音がした。叩き比べてみると，プラスティックの材質の方が音が幾分軽く，缶の方が響いて良い音が出ているように感じた。

3．授業の概要

次	(時)	ね　ら　い	おもな学習活動	評価	評価の方法
1次	1	民族楽器を知る	・鑑賞（ワークシートを用いて）をする ・気がついたことを発表する ・民族楽器に触れ，気がついたことをワークシートに記入する ・気がついたことを発表しあう	エ ア	発言聴取 ワークシート記述
2次	1	アタバキを作ることで楽器の構造を知る	・アタバキを製作する ・民族楽器の奏法とリズムを学び，練習する	ア ウ	観察 観察
3次	1	カポエイラの音楽に親しむ	・楽器の奏法を学ぶ ・班ごとに練習する ・合奏をする	イ	観察，ワークシート

4．題材に即した具体の評価規準

	ア　音楽への関心・意欲・態度	イ　音楽表現の創意工夫	ウ　音楽表現の技能	エ　鑑賞の能力
題材の評価規準	民族楽器の音色やリズムに関心をもって，鑑賞，演奏，楽器づくりに進んで取り組もうとしている。	民族楽器の音色やリズムをはじめ，カポエイラの音楽の面白さを感じ取りながら表現できるよう工夫している。	民族楽器の奏法やリズムを身につけ，ブラジル音楽特有の雰囲気を出して演奏している。	民族楽器に注目しながら，カポエイラの音楽の特徴や面白さを味わって聴いている。
学習活動に即した評価規準	・民族楽器の音色や演奏のリズムに関心をもって主体的に鑑賞している。 ・民族楽器の特徴や構造を進んで知ろうとする。 ・主体的に民族楽器を演奏している。	・班ごとに強弱や楽器の重なり方，速さについて，演奏を工夫している。 ・カポエイラ特有の音楽のリズムを体で感じながら，表現できるよう工夫している。	・民族楽器の奏法を身につけ，カポエイラの音楽特有のリズムを演奏できる。	・どのような民族楽器が演奏されているか注目しながら，カポエイラの音楽の特徴や面白さを味わって聴いている。

〈1時間目〉

導入として，カポエイラの音楽をCDで聴かせ，どのような楽器が演奏されているか予想するという活動を行った。「推理シート」に気がついたことを記入させた。はじめは，その音楽に少し驚いたようで，筆が止まっていたが，最終的には，聴こえてきた音を「ベンベン，カンカン，ドコドコ」等の擬音語であらわすことができていた。さらに，聴こえてくる音が何の楽器の音なのか，具体的に推理していた児童が8人いた。その児童達は，三味線や，和太鼓，ギター，マラカス，木魚，シンバル，チャンガラ，カスタネット，アゴゴ（正解）等の楽器を挙げていた。正解ではないが，ビリンバウの弦の音を三味線やギターとし，アタバキの音を，和太鼓やボンゴではないかと推理した児童が複数おり，自分が知っている楽器の中で，近いものを探し，自分なりの答えを導き出していることが確認できた。また，アゴゴの音を聴き取り，正解していた児童が2人いたことには驚いた。しかし，楽器を予想できる児童とできない児童には差があった。また，聴こえた音や楽器の他に，どのような雰囲気か，どこの国や地域の音楽かという予想も同時にさせた。下記が児童の実際の意見である。

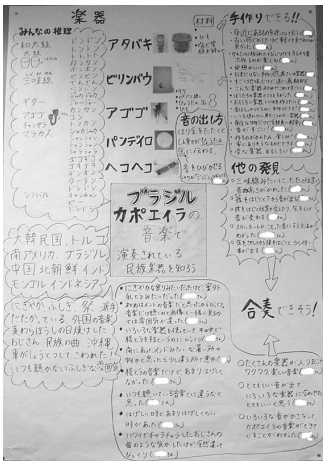
どのようなふんいきか	どこの国や地域の音楽か
外国の音楽，派手，にぎやか，たたかっている，にぎやかな祭り，民族の曲，ふしぎなふんいき，いろんな音が入っている　ほか	トルコ，ブラジル，南アメリカ，大韓民国，中国　ほか

続いて，5，6人のグループになり，実際に楽器に触れる活動を設けた。観察して絵を描いたり，音を出したり，思い思いに活動をしていた。楽器の構造と音の鳴り方，素材等に注目させるよう支援した。

その後，発表の時間を取り，発見したことをみんなで共有した。素材について意見が出た際に，授業で使っている民族楽器はどうやって手に入れたものか考えさせ，授業者が手づくりしたものだということに気づかせ，児童たちも作ることができるというところで授業を終えた。

〈2時間目〉

前回の意見をまとめた模造紙を用いてふりかえりをした（右写真）。児童は自分の意見が書いてあるので，関心を持って見ていた。そのため，児童が前回は何を学習したのか，今回は何をするのかということを把握でき，一定の効果があったように思われる。



この時間はアタバキ製作を主となる活動とした（左写真）。班ごとに製作したが，皮を張る作業は，皮を押さえたり，紐を通したり，引っ張ったりと大変なため，班の全員で協力して製作していた。皮を濡れたまま張っているため，完成しても良い音が出ないのだが，児童たちは喜び，自分たちが作ったアタバキの音が聴きたいようで，しきりにたたいていた。また，何日で乾くのかと尋ね，心待ちにしているようだった。そして，3時間目の合奏の準備として，リズム練習を行い，授業を終えた。

〈3時間目〉

楽器の演奏方法を学び，練習して合奏をするという流れで活動を行った。児童が活動の見通しを持てるよう，初めに最終的な合奏の形態を説明した。そして，全員でリズムの確認をし，できたところで，楽器の重ね方を変えてリズムをたたき，班ごとに行う発表の先行体験をさせた。わかりやすいように，黒板上で，実際に楽器の絵を貼りかえながら重ね方の練習をした。

その後，班ごとに分かれ，重ね方を決めさせた。その際も，わかりやすいように，黒板上に貼ったモデル図の縮小版を配り，楽器のシールを貼らせた。そのため，どの班もすぐに決まり，練習に時間を使うことができた。児童達は，楽器の出る順番やリズムを揃えることに気をつけ練習していた。そして，最後に，全員で輪を作り，班ごとの発表を間にはさみながら合奏をした。班の発表の際は，事前に決めた担当の楽器を演奏するが，全員がどの楽器も体験できるように，自分の班の発表以外は，楽器をまわして使い，全種類に触れるようにした。

全3時間，毎回ふりかえりシートを用意し，児童に感想を書かせた。児童たちは，身近にある材料で民族楽器が作れるということに驚きを感じたようだった。そして，ブラジルの音楽を学習することで，他の国の音楽にも関心をもち，知りたいと思ったという児童が多数いることがわかり，この授業の一番の目的が果たせたのではないかと思った。

Ⅴ　おわりに

以上，ブラジルの民族楽器ビリンバウとアタバキの製作と附属小学校での授業実践を通して，小学校音楽科における世界の諸民族の音楽の学習の一環として，手づくり楽器による教材開発，学習及び指導法の在り方について考察してきた。

その結果，大きく以下の4点について，成果を確認することができた。

第一に，1989年の学習指導要領改訂において，世界の諸民族の音楽や楽器についての学習が示されて以降，民族音楽学の研究成果の還元を反映し，視聴覚教材を中心に，教材や資料が豊富に供給されるようになった。その反面，視聴覚教材への依存など，学習や指導にやや画一的

な傾向がみられる実態があることが，複数の先行研究から確認された。その一因として，民族楽器を揃えることができないという声が聞かれるなかで，安部は打開策のひとつとして自ら民族楽器を製作して教材化しようと試み，そのモデルを提示した。

第二に，手づくり楽器を用いた授業実践には，単に民族楽器を揃えるためだけにとどまらない多様な意義があることを考察し，確認した。児童と教師の協働による楽器の製作が，楽器の構造や発音の原理を学習する手立てとして，児童の世界の諸民族の音楽の学習に対する動機付けとして効果的であることがわかった。

第三に，手づくり楽器の製作について，既存の研究書や解説書の記述をもとに，安部自ら製作し，その過程を跡づけることによって，小学校音楽科の授業に導入できるかどうかを考察し，実際の課題を提示した。本稿ではビリンバウとアタバキの製作について示したが，児童の主体的な活動として民族楽器製作を導入する場合，ケガや事故防止のために留意する点や，限られた時間内で児童のこだわりを大事にしながらスムーズに製作できる方法を，安部自らのアイデアやウェブサイトからの情報で補完して提示した。

第四に，民族楽器の学習と，日本の伝統楽器との学習の関連について，児童の発言や振り返りのなかで気付くことができた。児童が，カポエイラの音楽やビリンバウやアタバキの音を聞き，それらの特徴や印象を言葉で表現した際，三味線や和太鼓といった日本の楽器の音と比較する発言や記述が複数みられた。これは，附属小学校において，日本の伝統音楽についての学びが，児童にとってたしかなものになっている証であると思われた。そもそも，Ⅱ－１でふれたように，国際理解という観点から，我が国の伝統音楽と諸外国の民族音楽の学習は表裏一体の関係にある。このような学習の理念が，1989年の学習指導要領以降，20年の実践の積み重ねによって，具体化されていることが確認された。

一方で，積み残した課題も多い。今後にむけて，ここでは大きく２つの課題についてふれておきたい。

まず，楽器を手づくりする主体の作業のバランスである。すなわち，児童が主体でつくるのか，教師が主体でつくるのか，という問題である。これは音楽科の時間数の問題もある。児童主体となると，手づくりの難易度を下げる必要も出てくる。反対に教師主体で，教師が全面的に手づくりする場合，児童は授業及び教材としての楽器に対して，受動的な姿勢になってしまうことも否めない。

このことに関連し，もうひとつの課題に言及したい。世界の諸民族の学習において，取り上げた民族音楽の本質に，どこまで迫ることができるかどうかという問題である。この実践では，手づくり楽器の製作については，可能な限り，本物に近づけようと，作り方や素材にもこだわった。しかし，やはり「似て非なるもの」の域を脱することはできない。今回はブラジルの民族楽器を取り上げたが，ブラジルならではの環境や風土があって，それにふさわしい材料や作り方があり，音や音楽を育む人と文化がある。真似事ではなく，本物との違いをきちんと検証し，児童も差異を認識した上で，異文化としてとらえていく道筋を示す必要がある。それが他国の音楽文化を尊重する態度を養うことにもつながってくる。

一連の実践の後，2010年12月24日に，附属小学校の指導教員・神門洋子教諭と筆者らで，事後検討会を行なった。神門教諭には，「学校教育実践研究」の実施にあたって，年度当初の計画立案の段階より，現場の視点から継続して指導助言を仰いできた。神門教諭からは，まとめと今後の課題として，次の４点について指摘があった。

1．新しい学習指導要領のポイントである，各教科の内容等に即して思考・判断したことを，その内容を表現する活動と一体的に評価する「思考・判断・表現」の観点について，「聴く→作る→音楽表現」というプロセスをうまく重ね合わせていた。
2．児童一人ひとりの振り返りの記述を丁寧に拾い上げ，カラフルで魅力的な掲示物を作成し，前時の学びをしっかり確認していた点を評価したい。
3．楽器の製作に児童が主体的に参加する場面を設定し，身近な素材で楽器ができる新鮮な感動を味わうことができた。そして自ら製作に関わった楽器を用いて合奏に展開できるよう授業の流れを工夫していた。また，グループ活動を効果的に取り入れ，協力しながら楽器や合奏を作り上げていく喜びを感じる場面も組み入れられていた。
4．カポエイラの映像の鑑賞から，アタバキの製作，さらに合奏に至る活動の必然性について，説明や自然に導く働きかけが不足していた。その点で教師主導の授業という性格が前面に出過ぎていた。教師の思いがいっぱいあることは理解できるが，それらについて，いかに冷静に計画性をもって児童に提示するかを，今後検討していく必要がある。

いずれも本研究に対する的確で有意義な指摘であった。以上の点を，今後の研究に生かしていきたい。

付記

本稿は，平成23年３月13日（日）に山口大学において開催された平成22年度日本音楽教育学会中国・四国地区例会で口頭発表した内容の一部を再構成し，発展させたものである。なお，この口頭発表に際しては，「島根大学大学院学生に対する学会発表等に関する奨学金」の補助を受けた。

謝辞

本研究の実施に際し，島根大学大学院教育学研究科「学校教育実践研究」の附属学校側指導教員としてご指導くださった附属小学校教諭の神門洋子先生にお礼申し上げます。

注１　「世界の諸民族の音楽」という表現は，1998年の中学校音楽科の学習指導要領に用いられ，現在でも小学校，中学校問わず運用していることから，本稿でも用いた。なお，2008年改訂の音楽科の学習指導要領では，小学校では「諸外国の音楽」（第５学年及び第６学年），中学校で「諸外国の様々な音楽」のようになっている。

また，学習指導要領では，「世界の諸外国の民族楽器」（1989年改訂），「諸外国に伝わる楽器」（2008年改訂）など，本稿で対象とする楽器の概念について表現が異なっている。

本稿では，文脈に応じて，適宜，学習指導要領の表記を用いるものの，基本的には全体を通して，一般的に使われている「民族楽器」という表現を用いることとする。

注２　文部省「我が国の文教施策」（平成元年度）より，第Ⅰ部初等中等教育の課題と展望　第２章初等中等教育充実のための施策の展開　第７節国際化・情報化への対応１国際化

への対応について，以下のウェブサイトを参照した。
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad198901/hpad198901_2_037.html

注３　アタバキの製作に際して，以下のウェブサイトを参照した。
「犬ガム作り」http://www1.cablenet.ne.jp/suiko2/dog.htm
「ミニ太鼓を安価な材料で作る方法」http://www13.plala.or.jp/isobe-t/taiko.htm

引用・参考文献

１）磯田三津子「11．国際理解・異文化理解に挑戦する授業づくり」『新 音楽の授業づくり』教育芸術社，2009，pp.86-91.
２）井口淳子『国際理解に役立つ世界の民族音楽①東アジアと日本の音楽』ポプラ社，2003.
３）小原光一（編著）『小学校音楽科新学習指導要領ガイドブックポイントと事例』教育芸術社，2008.
４）神代充史『音楽指導ハンドブック創造力をつける手づくり楽器』音楽之友社，1995.
５）神代充史『みんな集まれ！－手づくり楽器で音楽会』同時代社，1987.
６）関根秀樹『新版民族楽器をつくる』創和出版，2003.
７）シーガー，アンソニー；濱田滋郎；奥田祐子「カポエイラの音楽」藤井（1995）pp.352-353.
８）塩野勇記（編著）『’89告示中学校学習指導要領音楽科の解説と実践』小学館，1989.
９）谷中優『創造性を育む音楽教育１10分でできる！手作り楽器の作り方・遊び方アイデア集』明治図書出版，2006年.
10）徳丸吉彦『民族音楽学』放送大学教育振興会，1991.
11）日本音楽教育学会「音楽科授業における『諸民族の音楽』の指導内容を再考する」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.４（１），2006.
12）福永喜史「ベトナム伝統音楽の楽器を使った鑑賞と体験学習 ― ベトナムの楽器トゥルン ―」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第７巻，2007，pp.83-92.
13）藤井知昭（監修）『《音と映像による世界民族音楽大系》解説書Ⅱ』平凡社，1988.
14）藤井知昭（監修）『《音と映像による新世界民族音楽大系》解説書Ⅱ』平凡社，1995.
15）藤原義勝『総合的な学習で使えるリサイクル手づくり楽器』日本書籍，2000.
16）藤原義勝『なかよし入門百科絵を見てわかる！手作り楽器の工作』有紀書房，1993.
17）藤原義勝『母と子の民族楽器づくり』美術出版社，1995.
18）降矢美彌子；安孫子啓；橋本牧；山﨑純子「音楽教育における楽器作りの意義」『宮城教育大学紀要』第42巻，2007，pp.89-100.
19）桝田祐子「【小学校実践】サンバのリズム」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.４（１），2006，pp.14-20.
20）文部科学省「小学校音楽科学習指導要領」1989.
21）文部科学省「小学校音楽科学習指導要領」2008.
22）文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社，2008.
23）山口修『応用音楽学と民族音楽学』放送大学教育振興会，2004.
24）若林忠宏『世界の民族音楽辞典』東京堂出版，2005.